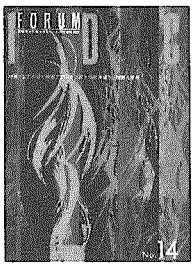
資料紹介

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

『FORUM』特集　変わりゆく南部アフリカと日本の経済協力――課題と提言――　No.14
東京　国際開発センター
1994年9月　106p.



本特集は国際開発センターが1993年秋に発足させた研究会の報告である。民主化の道を歩み始めた南アフリカ共和国が周辺諸国に及ぼす影響を考慮して，今後の日本の対南部アフリカ経済協力の課題と提言をまとめている。JICAが94年2月に同種の報告書を出しているが，本報告は南ア新政権の成立を踏まえ，かつODAのみならず民間経済協力も視野にいれているところに意義と特徴がある。本報告は以下の4部で構成されている。

(1)　変わりゆく南部アフリカと日本の経済協力／(2)アパルトヘイト解体後の南部アフリカにおける地域市場統合(高橋基樹)／(3)　南アフリカ共和国の資源戦略展望（森脇久光)／(4)　Future Economic Policies in South Africa and their Implications for Neighbouring Countries (G. Maasdorp)

(1)がグループ研究の成果であり，南部アフリカ諸国の現状と問題点を検討したのち，日本の経済協力の在り方を南アを除く周辺諸国と南アへの協力にわけて具体的提言を行なっている。その際，アジアの経験の活用の重要性を指摘している。(2)は南部アフリカに現存する三つの地域機構の再編過程を市場統合論の視点と，構造調整政策と市場統合の関係の視点の両面から分析している。(3)は金，ダイヤモンド，白金族などの資源大国である南アのアングロ・アメリカン社をはじめとする巨大企業の選挙後の企業戦略とそれが周辺諸国に及ぼす影響について検討している。(4)は地域統合の専門家である著者が，人種間の経済格差という負の遺産を引き継いだ南ア新政権の経済政策と周辺諸国との関係の修復について分析している。

全体として本報告は，現在南アおよび周辺諸国が直面している諸問題を包括的に取り上げ，それに立脚して日本の今後の経済協力の在り方を提示している点で時宜を得たものである。　（林　晃史）

サンガ・N・カザディ著　**キルウェ　ザ・ハンター**　〈新装版〉　名古屋　KTC中央出版　1994年　384p.

著者はザイール人で，京都大学で理学博士号を取得後，名古屋国際センターで民間大使として活躍，現在は三重大学の助教授である。この本の大部分は，1982年から89年の7年間，著者が初めて来日してから博士課程を終えるまでの日本での経験に割かれている。最後の第4部で，アフリカの歴史や文化の紹介，現在抱える問題についての分析，彼が中心となった「アフリカ村おこし運動 (SAVE AFRIKA PROJECT)」の概観が，アフリカへの理解を深めてほしいという著者の願いのもとに加えられている。

彼の目から見た日本についての印象は，考えさせられるところも多く面白い。アフリカ人に対する偏見についてのエピソード（下宿探しで苦労する話など）は，思わず今までの自分の言動を振り返らせるものがあるし，異なる価値観が現われているくだりも興味深い。あいつぐ送別会に対する疑問(p.22)とか，泣きだしたバスガイドについてのクールなコメント(p.93)など，不意をつかれるような感想や意見がある。いくつか挿入してある日本の知人たちのコメントなどから，彼の個性的な性格を知ることができるが，個人の違いだけではなく，文化の違いも知ることができるのではないだろうか。アフリカ人留学生会の運営にあたって，アフリカの国々からやってきた人たちをまとめていく大変さなどは，うがった見方ではあるが，今後のアフリカにおける地域協力の難しさを思わせる。

随想のかたちになっていることと，感情的な部分はあえて抑えて冷静に書き綴っていることで，やや平板な印象をうけるが，一種の比較文化の趣もあり，面白い本である。

なおこの新装版は，1990年の初版の資料データを改訂し，90年以降の著者の活動を加筆したものである。

（児玉由佳）

佐藤真佐美著　**山梨学院大学箱根駅伝物語**　甲府　山梨ふるさと文庫　1993年　269p.

大学の陸上長距離界で全く無名だった山梨学院大学が，1984年の創部から8年目で箱根駅伝で優勝した陰には，新コーチの就任とともに，ケニア人留学生ジョセフ・オツオリとケネディ・イセナの存在があった。この本は山学陸上部の物語であると同時に2人のケニア少年の異文化体験物語でもある。新任コーチはふとしたことから，アフリカの若者を招いてみることを思い立つ。選手にしようと考えたわけではなく，アフリカ人の素速い身のこなしや持久力から部員が何かを学びとってくれることを期待したのである。

舞台はいきなりジョセフとケネディの暮すキシイの村へ。2人とも10人兄弟，家の仕事をよく手伝い，学校の成績もよかった。走ることは好きだったが，ずば抜けた記録の持主というわけではなかった。ビジネスマンや先生になりたいと思っていた普通の少年だった。付属高校での6カ月の研修を経，大学の商学部に入学。ケニアの田舎でのんびり暮していた少年たちは，言葉のハンデやきびしい特訓にもめげず成長する。ソフトクリームが気に入って太り出したり，靴が足に馴じまず苦労したり，尊敬するイカンガー選手から「大学4年間は酒もたばこも家族もガールフレンドも忘れてがんばりなさい」とのアドバイスを受けたりする。先輩や同輩たちの敵愾心や，世間の“害人”論も経験する。だが，コーチが期待した「オツオリ・イセナ効果」は着実に波及していった。

家のことは忘れようとはいっても，彼らのふるさとは部族抗争の舞台となり，ケネディの家は焼かれ，叔父や恩師が殺されるという悲劇もあった。ヨーロッパでの試合の帰途，2人がコーチや監督を伴って故郷へ立ち寄る場面はドラマチックだ。著者ははじめ「オツオリ・イセナの物語」にしようと考えたが，真の国際交流とは何かを問うこと，あわせて山学大のチャレンジ精神を讃えて，この題にしたという。　（丹埜靖子）

服部伸六著　**アフリカ歴史人物風土記**　東京　社会思想社（現代教養文庫）1993年　192p.

本書は，服部氏が『月刊アフリカ』に1991年1月号より2年間にわたって連載した「アフリカの人と歴史シリーズ」の全15編を収めたものである。各編とも歴史上の人物を取りあげたもので，「読み物として肩の凝らぬことを心がけた」（「あとがき」より）というとおり平易な言葉でつづられている。アラル・アル・フェズ，デダン・キマチ，ンクルマ，ディヤロ・テリ，パトリス・ルムンバ，ナセル，ウフェーボワニなどの反植民地闘争・独立闘争期の政治家・運動家のほかに，アボメ王国の女戦士団アマゾン，コンゴ王国のベアトリス女王，サモリ，アルジェの海賊「赤髭」，イブン・ハルドゥーン，イブン・バトゥータ，ポルトノヴォの奴隷商人フランシスコ・フェリックス・ザ・スーサと，アフリカの歴史のなかからひろく題材が選ばれている。その動機は，「いままで紹介されなかったような人物（中略）を選んで取り入れることにした。アフリカに馴染みの少ない人たちにも「知られざるアフリカ」を読みとってもらおうという念願から」（「あとがき」より）であったという。

服部氏は，ウフェーボワニ編の最後にこんな注釈を付している。「私はウーフェの歩みの後半は多くの省略をおこなったが，それは外でもない，若いころからの繰り返しと延長に尽きているからのことで他意はない」。氏のアフリカとのつきあいはもう何年になるのだろうか。すでに傘寿を迎えられた服部翁は，現在も『月刊アフリカ』での連載を続けている。その熱意たるやと察せられるが，その一方で本書について「学問的追究に向かってはお手上げ」とあっさり告白したりと，じつに飄々としたものである。

ところで初出時に使われていた写真・図版を本書に掲載しなかったのはなぜであろうか。少々残念に思う。

（佐藤　章）

立石俊一著　**日本人とアフリカ人：この目で見た民族・人種問題**　東京　PHP研究所　1994年　244p.

本書は，ガーナで日本の援助プロジェクトに従事した著者が，その体験を通して民族・人種の問題を論じたものである。著者はこの本が「『アーロン収容所』や『日本人とユダヤ人』のような衝撃を読者に与えられることを願っている」(p.3)としている。

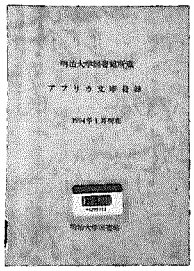
著者の主張はきわめて明快で，「黒人は，白人を上に見て，次が自分たち，一番下が東洋人なんだ，と考えている」ということである。そしてこのような人種観の理解が今までの日本人には欠けており，多くの日本人は経済技術力だけを理由に自分たちが優れていると思いこんでいる，と著者は言う。著者はこの「仮説」を証明するために，自身のガーナでの経験やアフリカからの研修生受け入れ事業に関わった経験，さらにさまざまな人から聞いた他のアフリカの国の経験などを援用している。

自身の経験をもとに人種問題を論じようという筆者の野心的な試みは，残念ながら失敗に終わっている。その最大の原因は，著者が「白人は」「黒人は」「日本人は」というステレオタイプを自らつくりあげ，それがあたかも普遍的な人種・民族観であるかのように主張している点である。

たとえば著者は，ガーナで「チャイニーズ」(東洋人一般）に対する差別感情が存在すると主張している。しかしこれは，一部の都市での一部の人間のことをことさら強調して，これがガーナ全体，あるいはアフリカ全体の傾向であるように断じている点に問題がある。自身の限られた経験と解釈で，そこからすぐに「アフリカ人は云々」と一般化するのが本書の全体的な傾向であり，あまりに安易な論調が目立つ。

本書は人種・民族問題に関する，著者の個人的な体験と個人的な解釈を論じたものである。その主張が正当がどうかは，アフリカに関わっている読者個々人が判断するべきものであろう。　(高根　務)

明治大学図書館所蔵「アフリカ文庫」目録　東京　明治大学図書館　1994年　ix＋327p.



明治大学には「アフリカ文庫」と呼ばれる大量の資料がある。由来は1979年4月のセネガル共和国大統領サンゴールの来日に遡る。氏はセネガル共和国独立とともに初代大統領に就任したが，政治家としてのみならず詩人，思想家としても著名な人物である。来日を機に明治大学では氏に名誉博士号を贈ることになり，氏を招いて授与式と講演会を行なった。その折，氏からは自身の献辞入り著書が大学に寄贈された。そこでそれまでのアフリカ研究の活動を一段と活発にし，アフリカ関係資料を充実させるために「アフリカ文庫」の設立が同年5月に決定された。設立当初は2000万円の基金で北アフリカ諸国と関連のある中近東アラブ圏までも対象として網羅的な収集をおこなったが，のちに慶應義塾大学で中近東アラブ圏の資料を重点的に収集していることに配慮して重点をアフリカに絞ることになり，図書選定委員会のもと毎年度300万円が追加資料収集に充てられてきた。現在は基礎文献の収集はほぼ終了し独立後アフリカの新聞，雑誌の収集に力を注いでいる。

本書は1994年1月現在明治大学図書館中央本館が所蔵するアフリカ文献の目録である。収録点数はマイクロ化された外交文書を含む図書が5781冊，官報を含む逐次刊行物が274タイトルである。図書の排列は日本十進分類法の1000区分の分類番号順となっており310～319の「政治」が全ページ数の2割に及び資料数の多いことがわかる。また分類番号220～229の「アジア史，東洋史」(中近東アラブ圏のものが多い)，240～249の「アフリカ史」，290～299の「地理，地誌，紀行」，330～339の「経済」に該当する図書がこれに次いで多く，各々全ページ数の1割前後を占めている。これは「アフリカ文庫」の性格を知る目安ともなろう。日本で閲覧できる資料の目録として広く利用していただきたい本である。　(鈴木陽子)

アミルカル＝カブラル著（アミルカル＝カブラル協会編訳）**アミルカル＝カブラル抵抗と創造——ギニアビサウとカボベルデの独立闘争**　東京　柘植書房　1993年　334P.

アミルカル＝カブラル。言わずと知れたアフリカの革命家，革命理論家である。本書は，1969年および72年の彼の講演に，編訳者による解説部分を加えたものである。

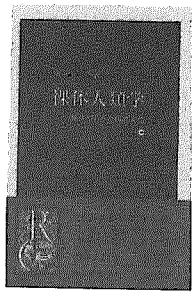
私自身，「革命」という言葉がやや色あせてから育った世代に属している。したがって，本書を手に取って開くまでに若干のためらいがあったことは否定できない。つまり，本書の今日的意義は何か，などと考えていたのである。しかしながら，カブラルの言葉を読み進むうちにその種の疑念は払拭された。面白いのである。

確かに，たとえば科学技術に対する彼の単純な進歩観は，多分に当時のアフリカの思想潮流を反映したものであり，時代の制約を感じざるを得ない。その意味で本書を「革命の手引き」として読むことには限界がある。しかし，本書からは，1人のアフリカ人インテリが自らの社会を変革しようと努力する姿，そしてその過程で発生する摩擦が，非常に具体的に浮かんでくるのである。

襲撃地点に時間どおり集まらない，モーターボートのエンジンや自転車をすぐに壊してしまう，道草を食ってばかりいる……カブラルが自らのゲリラ兵士を嘆くこれらの言葉を読むと，私たちが知るアフリカの雰囲気が伝わってくるのだが，同時にカブラルが運動の中で感じていたであろう孤独がそこはかとなく漂ってくる。カブラルの肉声が，彼と彼を取り巻く社会を理解するための格好の素材を提供してくれる。その意味で貴重な書だと私は思う。カブラルの死から20年以上が過ぎた，ギニアビサウとカーボベルデの現在の姿についてもっと知りたくなる，そんな一冊である。

（武内進一）

和田正平著　**裸体人類学——裸族からみた西欧文化**　東京　中央公論社（中公新書）　1994年　196p.



著者の言葉によれば，西アフリカのトーゴ共和国のアタコラ山中において裸族に遭遇し，強い衝撃を受け，彼らの裸体に施されている瘢痕文身や装身具に大きな興味を抱き，アフリカ文化の本源を探るとすれば裸族の存在を無視できないと考えた著者が，ほぼ20年にわたって考察した「裸体観に関する文化人類学的な再検討」（p.ii）の成果が本書である。

事実，本書ではニューギニアの裸族の紹介からはじまって，アマゾン，東南アジア，オセアニアの裸族の概観を示したうえで，体毛の男女差，衣服の起源，瘢痕文身，裸族と巨石建造物の事例，ポリネシアの皮膚装飾，さらには裸体と儀礼や宗教との関係にいたるまで，世界各地の裸体に関する事例や研究がきわめて多数紹介・検討されており，著者の裸族や裸体に対する関心の強さが十分にうかがわれる。本書を一読すれば，裸族について該博な知識を得ることができるだろう。

なかでも，フレーリッヒの研究に基礎をおいた「裸族ベルト」説の提示は注目してよいだろう。しかし，裸族ベルトの文化特性として列挙されている分節組織，集約的農耕，鍛冶師などが裸族社会と結び付く必然性の説明がみられないのは残念である。たとえば著者は，鍛冶師が裸体である理由を技術の神秘性や魔術性に求め「普通人と違う地位と役割を，もっとも単純素朴に表明したのが裸体であり，鍛冶師は裸族の中でも真の裸族である必要があった」（p.54）としているが，裸族の中で裸体であることは普通人と「同じ」であるとしか考えられないし，「真の裸族」とは何かという点についても説明がない。

その意味で，本書を文化人類学的な再検討の成果とみるのには抵抗があるが，世界の裸族や裸体に関する多様な知識を得たいと思う読者には，うってつけのものであろう。

（細見眞也）